



空知太栄光キリスト教会 牧師

銘形 秀則

神のトーヴとヘセドの世界に招かれて

はじめに

私は北海道の炭鉱の町で生まれ、そこで育った。町には教会はなく、また宣教師と言われるような人にも会った記憶がない。私が上京して大学生活をするまでは、私はキリスト教とは全く無縁であった。

私の家系は祖父の前の二代にわたって浄土真宗の僧侶であったらしい。父方の祖父は経が読めたらしい。母方の祖母も熱心な浄土真宗の信者であった。特別な信心を持っていなかった両親のもとで、十分な愛情のもとで育てられた。

私は幼少の頃から音楽が好きで、中学生の頃はオーケストラの指揮者になるのが夢であった。高校一年生の冬、母から将来の進路を決めるように促されたとき、私は好きな音楽の道に進むことを決心した。両親はそうした私の意向に理解を示してくれたので、その時から音大の受験を目指して本格的な勉強を始めたが、力及ばず失敗に終わった。この経験は私の生涯におけるはじめの挫折であった。このために浪人生活を余儀なくされ、一人で生活することの淋しさもあって、高校時代に仲の良かった友人(彼も受験に失敗した)と一緒に上京し、一緒に住むことになった。

彼と過ごした一年間は私のエゴイズムの醜さを嫌というほど知らされた時であった。彼も音楽が好きで、音楽の話をよくしたが、時としてどちらか自分考えを主張し、強要し、しまいには口げんかをして何日も口を聞かないということがしばしばあった。自分のことで頭がいっぱいで、友人としての思いやりがなかったのである。私が翌年、音大に合格したことを契機に、彼は郷里に帰ってしまった。

私を教会へと導いた一枚のチラシ

この経験は私の心の中に、自分の性格に対する嫌悪感と彼に対する良心の呵責を残した。大学に入っても、このくらい重苦しい経験は解決されることなく、私を苦しめた。そしてそれを打ち消すかのように、一生懸命に音楽の勉強に励んだのである。しかし大学一年の夏、自分自身に失望して、淋しさと不安の中にあつて苦しんでいたとき、ふと自分の机の片隅にあつた一枚のチラシに目が留まつた。このチラシは一年程前に、江古田近くの路上でもらつたものらしい。とにかくこの一枚のチラシが捨てられずに机の片隅にあつたのは神の導きであつた。この一枚のチラシが私の足を生まれてはじめて教会へと向けさせたのである。そのチラシには「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(イエス・キリスト)と書かれてあつた。九月になつて、一縷の望みをもつて初めて訪れた教会が「練馬神の教会」だつた。私は自分のうちにある罪の深さと、その罪の力にどんなに無力であるかを素直に認めたととき、自分にはどうしてもこの自分を救ってくれる救い主が必要であると知つて、イエス・キリストを自分の救い主であることを信じてこの方に従つていこうと決心し、翌年の一九七二年の五月のペンテコステの日に洗礼を受けた。

しかし、人間的な決心はもろくはかないものである。私が真の意味で信仰による救いの確信を得るまでにはそれから四年という年月を要した。教会での礼拝を守り、大学でも積極的に聖書研究会の活動にわりもしたが、私の関心はもっぱら神のことよりも音楽の方であった。音楽が私の偶像となっていたのである。その頃の私はだれが見てもクリスチャンだと信じられるようなものではなかった。

娘の誕生を契機に、私を襲った強烈な渴き

大学二年目の秋、音大祭で「聖研」が主催する伝道集会にやって来た二年先輩の女性と出会った、それが私の生涯の同労者となる私の妻だった。私は学生結婚したために、途中で大学を自主退学し（正確には学費を払わず自動的に除籍ということに）、ピアノ教師をして生活費を得た。信仰的な訓練を受けることもなく、全くこの世の生き方と変わらぬ生活をしていたが、やがて一人娘の飛鳥が生まれてから、強烈な渴きにさいなまれ、住居とは別に、静かなアパートの一室を借り、朝早く（三時頃）から八時頃まで、集中した祈りの時を持つようになった。まさに、「エノクがメトシエラを生んで後、神とともに歩んだ」（創世記五・一二）と

あるように、私の生活は刷新された。この経験が今の私の霊的な生活のスタイルを作っているように思う。家庭礼拝がはじまり、妻と一緒に聖書を読み、その意味することを尋ね求めるようになった。信仰が刷新されてから、千葉の習志野(津田沼)から東京の練馬の教会に二時間もかけて毎週休むことなく通うようになった。朝八時に家を出て、帰ってくるのはいつも夜の十二時頃だった。たとえ娘が熱を出して吐いたりしても、かまわずに教会に連れて行くような、今から思うとかなり強引な信仰生活を送っていた。

神からの召命の声が

祈りの生活が始まってから二年半経ったころ、全く予期せず、神のみことばにかかわる働きのために、生涯をささげべく神が私を召しておられるように感じ始めた。しかしすでに家庭を持ち、幼い子どもがいる中で神に従うことはどういうことか、仕事を辞めなければならぬとしたら、神は経済的な保障をどのように与えてくれるのか、その確信を得るためにアブラハムの生涯を学んだり、主に従った人々の召しに関する本を読みあさったりした。主の迫りは日増しに強くなり、主に従うかどうかその決心を迫られて当惑した。

そのときに与えられたみことばが、マタイ十四章二八、二九節であった。

『主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。』

イエスは『来なさい。』と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに
行った。」

「舟から出る」ということは勇気がいるものだ。しかし「来なさい。」と言われる主の言葉に、私は幾分か身体をふるわせながら、「主よ、従います」と答えたのを今でもはっきりと思い出す。

神の召しを受けたものの、具体的に私はどうしたらよいのか分からなかった。今野孝蔵牧師の自宅を訪ねて、これまでの神の導きを報告し相談した。今野先生はルカ十四章二八〜三十節を引いて、興奮気味であった私の決意に水を差されたが、そのことが私の決意をより強めさせた。ペテロとコルネリオのように、私が今野先生に相談したい旨の電話をしたその朝、先生の方にも私が献身するとの導きがあったことを後で聞かされて知った。当時、練馬神の教会では私の他にも多くの献身者が出た。しかしどういうわけか、私の家族だけがフルサポートを与えられたのである。このことは内心、今でも、神のえこひいきだと受け止めている。

還暦からの新たな召し

みことばの戸が開かれるときには、いつもなんとも言えない霊的な喜びと感動を覚える。これはいわば神的中毒のようなもの。神のことばを取り扱い、みことばに仕える召しを与えられてから、自分の賜物は伝道者というよりは、みことばを教える賜物が与えられていることがわかった。使徒パウロが愛弟子のテモテに「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまつすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」と手紙で書き送ったが、そのことばは還暦を迎えた(二〇一二年一月)私にも語られている。具体的には、聖書が書き記された原語でみことばを味わうようにと導かれている。とても地味な取り組みであるが、主がお許しになる限り、残された生涯をそのことばのためにささげたい。そして、ダビデが「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみ(トーヴ)と恵み(ヘセド)とが私を追って来る。」(詩篇二三篇六節)と歌ったように、私もそのような恩寵の世界に招かれた生涯であったことをあかしできる者になりたい。